

徐京植

それではここでもう少しデリケートな質問を二つしたいと思います。

まず簡単な方からお聞きしますが、アメリカ合衆国もイスラエルも、一応制度としては民主主義国でオープンソサイエティ、開かれた社会、言論の自由、報道の自由を保障されている社会ですね。ですから、いまサラさんがおっしゃったように、ガザで何が起きているか西岸で何が起きているかはイスラエルの市民にもわかるわけです。にもかかわらず、九割以上のイスラエル市民がガザ攻撃を支持しているという現実があるわけです。しかもその人たちは、直接ホロコーストを経験した世代でもないし、またヨーロッパ出身でもない人たちが多数になっているわけです。モロッコとか、イエメンとか、あるいはチュニジアとかあるいはロシアとか、そういったところから来た人たちが、いわばそのホロコーストの記憶というものを神話として共有しつつ、ガザならガザ、西岸なら西岸で起きている、形容しがたい出来事に対して、今みなさんご存じのようなああいう攻撃的な反応をする、そういういわば記憶を神話化して、実は直接関係ない世代や関係ない地域からきた人たちのあいだで、共有させていくポリティクスについて、どういうふうにお考えでしょうか。これが一つ目の質問です。

サラ・ロイ

不幸なことに、抑圧者と被抑圧者とのポリティクスというものが作用しています。情報は隠されて

いない、普通に手に入るにもかかわらず、アメリカのユダヤ人組織もイスラエル人も知ろうとしない、ということがあります。彼らはガザ地区や西岸地区で起きていることを知らないのですが、それは知りたがらないからなのです。私自身、もう何年もガザ地区、西岸地区、イスラエルを歩き回っていますが、イスラエルに住んでいる友人や親戚と話をし、ガザで何が起きていると思うか、そして占領地であるイスラエル政府が何をしていると思うかを尋ねると、彼らの知識や認識というものは実際に起きている現実とはほとんど関係のないことばかりで、聞いても楽しくないことは聞きたくないという感じがあります。もちろんこれは、どんな人間にも傾向的に見られることで、自分が抑圧者で加害者であるだなんてことは誰も信じたくはないわけです。とりわけイスラエル内外のユダヤ人は、自身を被害者だと認識していますし、また無垢な民であると肯定したい強い欲求があります。実際、過去から現在にいたるまで自分たちがパレスチナ人に対して何をしてきたのか、それはぞっとするほどの不正義であり犯罪行為なわけですが、それを直視するのはつらく難しいことですし、加害者として被害者のパレスチナ人と向き合うということもなかなかできません。こういったことがユダヤ人の自己認識を支えていると、自分たちが無垢であるという思い込みから抜け出そうという意思も能力も出てこないのです。この前のレバノン侵攻のときや今回の残虐なガザ攻撃においてさえ、ある意味ではもう信じがたいほどあからさまに、イスラエル人側から「われわれこそが攻撃され苦しめられている」などと心底信じ切って言われているのを耳にします。私の知っているかぎり、平均的イスラエル人は本当にガザや西

岸で何が起きているか知らないのです。

しかし、知らないことに言い訳はききません。というのも、イスラエルのメディアはあらゆる点でアメリカのメディアなどよりはるかにオープンであり、実際知ろうと思えば知ることができるのです。たとえばイスラエルのヘブライ語の新聞では、アメリカでは見られない幅広い論調を読むことができます。アミラ・ハスとかアキヴァ・エルダールとかギデオ・レヴィのような優れたジャーナリストはアメリカにはいません。もちろんイスラエル政府はどんなメディアにも圧力をかけてはきませんが、にもかかわらず彼らは、イスラエルの政策に対して強く反対する人びとの意見を伝えてくれます。

さらに言えばこのインターネットの時代、知ろうと思えば情報へのアクセスは本当は簡単なのです。無知を正当化できる理由はありません。しかしそれでも彼らは断固として知ろうとしない。それは、自分らの潔白さの主張と深く関わっています。逆に言えば、自らの罪を反省することには大きな痛みを伴うために反省できない、ということかもしれません。しかし私は、こうした状況のままでは、無知であるほうがはるかに高い代償を払わせられることになると思います。というのも、ユダヤ人とパレスチナ人とがともに普通の生活を営むことのできる可能性もあるのですから。最近ハーバード大学であった一つのシンポジウムでの話なのですが、あるアメリカ政府の役人が司会をしていて、普通であればイスラエル政府を支持するような立場であるにもかかわらず、その人は次のようなことを言っ

たのです。「一九四八年のイスラエル建国以降、イスラエル人は普通の生活を知らず、パレスチナ人は正義を知らない」と。重要なことを言ったと思います。本心からお互いを承認し、普通の生活へと前進するためには、まずイスラエル人がこれまで何をしてきたのか、いま何をしているのかを認めなければならぬと思います。

あと少し戻って補足ですが、「tolerance (寛容)」という言葉に関して一言。「tolerable (こころまで我慢できる/許される範囲の)」と言った場合の思考の形式においては、むしろ寛容さを排除してしまっているというある種の皮肉な状況が生じていると思います。

徐京植

それでは、私の二つ目の質問ですけれども、その前提として次のような情景を想起したいと思っています。私は直接に会う機会がありませんでしたが、サラさんのご友人であったエドワード・サイドが、二〇〇三年のイラク戦争開戦の直前にエジプトのアレクサンドリアで講演をしました。彼はエジプトにいたときにイラク戦争開戦の報道を知ったわけです。もちろん対テロ戦争に反対し、イラク攻撃に反対してきた彼にとってはひじょうに悲痛なニュースをエジプトで知ったわけです。

そのときの映像はNHKのドキュメンタリー番組で放映されたのですが、サイドは、握り拳をくっつけて離す、またくっつけて離す、こういうジェスチャーをしながら、合衆国国民として、また

岡真理＋小田切拓＋早尾貴紀 編訳

サラ・ロイ Sara Roy

ホロコースト から ガザへ

パレスチナの政治経済学



戸塚 ☎862-9411

横浜市立図書館



2043764252

青土社